

編 集 後 記

今年も例年以上に暑さの厳しい夏となりました。通り雨のような気象の急変、朝晩の空気の重さ、肌にまとわりつく湿気の不快さ——日々の暮らしのなかで「地球に何が起きているのだろう」と、妙な焦燥感を覚える瞬間が少なくありません。地球温暖化という言葉はすでに耳慣れたものですが、その科学的分析をいくら理解しても、この感覚的な不安は拭いきれないのが正直なところです。このジレンマのような感覚は、医療の現場、とりわけ高齢化の進行と技術革新の狭間で進化し続けるリハビリテーションの現状と、どこか重なるように思います。超高齢社会において、医療はますます高度化・専門化し、その一方で、患者一人ひとりの QOL や「生きることの意味」への配慮がこれまで以上に求められています。こうした中で、私たちリハビリテーション専門職が果たすべき役割もまた、これまでの「機能回復」にとどまらず、生命予後や尊厳を守るケアの構築にまで及びつつあります。

日本集中治療医学会雑誌への投稿ならびに学術集会の演題では、リハビリテーション関連のテーマが徐々にですが増えています。集中治療における最新の知見とともに、多職種が協働して重症患者を支える実践の広がりを感じます。医師をはじめとする各専門家の高い見識に触れながら、編集協力委員として、また

理学療法士としてこの誌面に関わらせていただけたことを誇りに思います。本誌が、領域横断的な思考と実践をつなぐプラットフォームとして、科学の知と現場の実感をつなぐ場として、今後ますます読者の皆様にとって実り多き存在となることを願っています。

(文・飯田 有輝)